

教育現場における 日本型コミュニケーションの可能性

佐藤 毅*

1 はじめに

21世紀に入って急速に発展した情報技術は、教育の現場にも大きく影響しIT (Information technology) 教育は必須のものとなった。しかし、情報を処理する技術のみでは解決できない問題が山積することになり、新たな課題も提出されることとなった。その最大の問題が、Communication能力である。情報 (Information) を活用するためには、技術 (Technology) だけでは不足であると気付いた段階で発信者側と受信者側との通信 (Communication) もしくは相互理解を重視する視点が生まれることとなった。IT教育はICT (Information and Communication Technology) 教育へと変貌し、現在に至っている。

しかし、情報処理技術教育に比してコミュニケーション教育が、果たして十分になされているか疑問である。氾濫する情報の収集法、加工法、保管法に比して通信法や共有法は十分とは言えない。それは発信者側と受信者側の環境や発想法あるいは喜怒哀楽まで思いを馳せなければ完全なものにはなり得ないからである。

情報技術自体が非常に新しいジャンルであり、また世界的な広がりを持つゆえに、その根幹のコミュニケーション能力も世界的でなければならないとする一種強迫観念によって考えられて来ている現状に、日本型コミュニケーションは見失われつつある。考えてみれば、1868年以降の近代日

本が260年余続いた江戸の文化を徹底的に排除することで西欧化を果たし、1945年以降の日本が日本的なものを排除して、アメリカ文化を無作為に導入したと同様に情報化社会という変動の中で日本型コミュニケーションは衰退の一途にある。これは単純にIT教育とかコンピュータ指導とかに止まらず、日常の教室にも蔓延しつつある問題である。YESかNOか、あるいは正しいか悪いかという二者択一の教育の現場は、やがて疲弊してしまう。

このような時代にあって、日本型コミュニケーションの長短を検証しながら、その長所を教育現場に活用すべきではないかという思いで本論を起こしたい。

2 日本型コミュニケーションの原点

ここでコミュニケーションという語に「日本型」とか「西欧型」という限定が存在するかどうかを考えてみる。本来、コミュニケーションとは情報伝達のみを指すのではなく、原義から言えば、ラテン語の *communicatio* が由来で、「分かち合うこと」という意味から派生している。「分かち合う」という行為には単純に情報を共有するだけでなく、互いの「思い」までも共有することを意味している。そこには生活環境、習慣、性格、目的、人格をも含む。言葉を換えるなら、国民性とか民族性によって「分かち合う」意味が異なってくる。例えば、共通の文化的基盤のない者が必要以上に「YES」、「NO」を明確にしなければ誤解の種を作るといった危惧などもそれらから起因し

* 江戸川大学

ている。日本が国際競争において後塵を拝する日本の経済発展の気運に、「『NO』と言える日本」（共同執筆エッセイ。盛田昭夫・石原慎太郎、1989）などがベストセラーになったのは、その現象を象徴するものであった。このようにグローバル社会においては、明確な是非のアクションがコミュニケーションにおいては必要不可欠であることは認めざるを得ない。しかし、盛田昭夫や石原慎太郎が声高に「『NO』と言える日本」を提唱しなければならなかったのは、それだけ日本人のコミュニケーションが世界のスタンダードではないことを反証するものであった。それだけ日本人のコミュニケーションが他の国とは異なるということでもある。ではここで言う「日本型コミュニケーション」とは、どのようなものでありかつどのように形成されたものであるかを考えてみよう。

江戸という場所は京都とか奈良とは違い、それほど歴史的に注目されるべき場所ではなかった。徳川以前は日比谷の入江、江戸前島、そして北条時宗と縁深い円覚寺の無学祖元の建立した寺の領地ぐらいであり注目される地ではなかった。1590年8月1日に豊臣秀吉の命で徳川家康が来ることになった。おそらく秀吉は家康の危険性をいち早く察知して、遠ざけたというのが真相であろう。着任した徳川家康は、この江戸の地に新たな計画をもって都市構築に当たることになる。まず着手したのは、江戸前島の付け根を運河で結ぶ（道三堀）掘削工事と小名木川の建設であった。その後、俗に天下普請と呼ばれる大工事へとつながり、第一次天下普請は日比谷入江の埋立て（1604年）、第二次が外濠と大名小路の増設（1613年）、第三次が平川改修工事（1620年）、第四次が西丸及び江戸城東郭の外濠石垣工事（1622年）、第五次が江戸城外郭工事（1636年）、そして最後の第六次天下普請は神田川整備工事（1660年）となる。このように見てくると江戸の都市計画は沖積地の狭さから来る埋め立ての必然性と海上都市江戸から来る上下水の限界が最大の問題であったことが分かる。武蔵野台地の東突端部に位置す

る江戸は埋め立てによって広がりを見せたので、坂のつく地名が多い。胸突坂（文京区目白台）、行人坂（目黒区下目黒）、道玄坂（渋谷区）、九段坂（千代田区）、神楽坂（新宿区）、魚籃坂（港区）、権田原坂（港区）、網坂（港区）、団子坂（文京区）、切支丹坂（文京区）、仙台坂（港区）、権之助坂（目黒区）、宮益坂（渋谷区）、三宅坂（千代田区）、無縁坂（台東区）、菊坂（文京区）、昌平坂（文京区）、南部坂（港区）、江戸見坂（港区）、鳥居坂（港区）、と思いつくまま挙げても枚挙に暇はない。

さて、京都ならば御所を中心に鬼門に比叡山があると同様に江戸の都市計画でも鬼門の封印は必須であった。そのため東叡山寛永寺の建立となり、裏鬼門は三縁山広度院増上寺を配し、かつ江戸の地の氏神的存在である神田明神を鬼門のラインに赤坂日枝神社を裏鬼門のラインに乗せることでより封印の霊力を増幅するようにした。これらの都市計画の予想を越える形で人口増加が四代將軍徳川家綱の時代に訪れる。もともと狭い地域に住居が密集していた明暦年間1657年1月に俗に言う「明暦の大火」が起こる。もともと密集地の木造平屋で暖房や調理に使う火は危険と隣り合わせであるから火事の頻度も高かった。その中でもこの「明暦の大火」は大名・旗本屋敷930余、江戸の市街地60%が消失、江戸城（千代田城）天守閣をも焼失、死者は10万人を越える未曾有の大火災であった。その災害が両国回向院の成立に繋がっている。その復興は江戸への職人の大量流入を生み出し、結果人口増加を加速することになった。

その人口増加に呼応して「瀬替え」と「海運の整備」が急がれることになる。「瀬替え」は利根川の東遷事業と江戸川の成立へとつながり、「内川廻し」として江戸の食を支えることになる。また、太平洋沿岸輸送（菱垣廻船、樽廻船など）や日本海沿岸輸送（北前船、西回り廻船、東回り廻船など）の整備は江戸の食を支えるばかりでなく名実共に政治経済の中心を江戸にする牽引力となった。ここに都市型人間が形成されることになる。「江戸は諸国の入り込み」（「初葉南志」）「言

葉は国の手形」(歌舞伎「出来穂月花雪聚」)「駕籠に乗る人、駕籠担ぐ人、そのまた草鞋を作る人」(浄瑠璃「博多小女郎波枕」)「安物買いの銭失い」(歌舞伎「梅雨小袖昔八丈」)などという名文句が作られるのもこれらの社会状況が背景にある。

このような社会状況の変化と庶民の思いを説明するのに分かりやすい例がある。江戸歌舞伎の創始であり、花形であった成田屋市川團十郎の登場である。初代市川團十郎は荒事の芸風で一世を風靡した。それは気風の荒っぽい地方出身の職人達に後押しされて、江戸歌舞伎という斬新な舞台芸術を作り上げることになった。その初代が楽屋で暗殺され、2代目團十郎が襲名となる。しかし、その時期は既に都市型人間が主流となり、荒事は時代遅れのヒーロー像になった。そこで2代目は関西歌舞伎の名女形生島新五郎に和事の芸風を伝授してもらうことになる。その荒事と和事の融合にこそ江戸歌舞伎の神髄がある。成田屋伝来の歌舞伎十八番にある「暫」の鎌倉権五郎景政や「助六由縁江戸桜」の花川戸の助六と名乗る曾我五郎時致は江戸庶民の憧れであり理想的男性像であった。その憧憬は成田街道の盛況へとつながって行く。成田街道は江戸初期、佐倉藩への道ということで「佐倉道」と呼ばれたが、江戸庶民の作り出す市川團十郎人気を引き金となって、中期頃からは「成田道」として変貌していったのである。小岩にも市川にも関所があったのだが、「中川は同じあいさつして通る」とか「通ります通れ葛西のあふむ関」という川柳でも分かる通り、関所の機能はほとんど果たしておらず、それゆえ江戸後期の小旅行ブームには実に手頃なコースであったのである。このように江戸庶民の美意識は荒事と和事の融合の中に形成されることになった。それは江戸という狭い空間での人間関係の知恵として発展して行った。

粋、通、仇といった都会的な美意識はこのようにして意識化されて行くことになり、その反対語としての浅黄裏や野暮は田舎者を象徴する言葉として嘲笑や禁忌として意識化されることになる。それは具体的な行動規範にも現れて江戸しぐさと

いう言葉で江戸っ子らしい人間関係が形成されることになる。

「三つ心、六つ躰、九つ言葉、十二文、十五理で末決まる」という子育ての基本は三代続けば江戸っ子の文化になる。繁華街での狭い路地の往来しぐさである「七三の道」、「肩引き」、「傘かしげ」、「うかつあやまり」や乗り合い舟での「こぶし腰浮かせ」、あるいは人間関係のなかで嫌われる「時泥棒」、「胸刺し言葉」、「逆らいしぐさ」などは都市生活者の知恵であり、粋・通の具現として大切にされた行動規範であった。追記であるが、成田屋の歌舞伎十八番の中に「外郎売り」という演目がある。これはドラマ仕立てのものではなく、團十郎が薬(外郎)の効能を口上するだけのものである。それは早口言葉、滑舌の妙、話の間といった要素をふんだんに盛り込んだ演目である。「江戸は諸国の入り込み」と言われた地であって、共通語とはこういうものであるとする啓蒙的意図が、この作品にはある。おそらく江戸の人々は、市川團十郎の舞台から、粋な話し方、語り口を学んだに違いない。話しことばの習熟は、コミュニケーションの基本であることを熟知していた江戸っ子がここにいる。

さて、明治維新を境にして、日本の視線は国内ではなく外国へと向けられることになった。明治近代化は、欧米諸国の模倣と経済力に費やされることになった。資源の乏しい日本が国際的競争力をつける方法は選択肢が限られている。その後の日清・日露の大戦から1945年8月に至る近現代史はその選択肢の結果であった。その選択の段階で自由民権運動、大逆事件、大正デモクラシー等々多くの軋みがあったことは言うまでもない。その過程で日本人は多くのものを獲得し、そして多くのものを失った。

エドワード・モース(Edward Sylvester Morse)の「日本その日その日」(*Japan Day by Day*)には明治初年代の日本人の印象を次のように記している。

人々が正直である国にいることは実に気持がよ

い。私は決して札入れや懐中時計の見張りをしようとしな。錠をかけぬ部屋の机の上に、私は小銭を置いたままにするのだが、日本人の子供や召使いは一日に数十回出入しても、触つたらぬ物には決して手を触れぬ。私の大外套と春の外套をクリーニングするために持って行った召使いは、間もなくポケットの一つに小銭若干が入っていたのに気がついてそれを持って来たが、また、今度はサンフランシスコの乗合馬車の切符を三枚もって来た。この国の人々も所謂文明人としばらく交っていると盗みをすることがあるそうだが、内地に入ると不正直というようなことは殆ど無く、条約港に於ても稀なことである。日本人が正直であることの最もよい実証は、三千万人の国民の住家に錠も鍵も門も戸鈕も——いや、錠をかける可き戸すら無いことである。

外国人は日本に数ヶ月いた上で、徐々に次のようなことに気がつき始める。即ち彼は日本人にすべてを教える気でいたのであるが、驚くことには、また残念ながら、自分の国で人道の名に於て道徳的教訓の重荷になっている善徳や品性を、日本人は生まれながらに持っているらしいことである。衣服の簡素、家庭の整理、周囲の清潔、自然及びすべての自然物に対する愛、あっさりとして魅力に富む芸術、挙動の礼儀正しさ、他人の感情に就いての思いやり……これ等は恵まれた階級の人々ばかりでなく、最も貧しい人々も持っている特質である。

また、モースよりも遅れて日本に来たイザベラ・バード (Isabera L. Bird) の「日本奥地紀行」(*Unbeaten Tracks in Japan*) は、明治11年6月から9月にかけての東京から北海道までの旅行を記録したものである。その中には現在では既に忘れ去られてしまった日本人の原風景が溢れている。

ほんの昨日のことであったが、革帯が一つ紛失

していた。もう暗くなっていたが、その馬子はそれを探しに一里も戻った。彼にその骨折賃として何銭かをあげようとしたが、彼は、旅の終わりまで無事届けるのが当然の責任だ、と言って、どうしてもお金を受けとらなかった。彼らはお互いに親切であり、礼儀正しい。それは見ていてもたいへん気持ちが良い。

特に後者のイザベラ・バードに顕著に見られるが、横浜、浅草などの記述には先進国イギリスから見た開国間近のバランスの崩れた日本の様相を記述している。そして日光を過ぎ会津、新潟、米沢の描写は、バランスを崩した開花期の世相への嘲笑から、実に慈愛に満ちた視線へと変化して行く。それは文化果つる処に文化は貯まるという例え通り、田舎に入るほど江戸の文化的名残が濃厚になってくることを示している。つまり開花期のモース (アメリカ人) にしてもバード (イギリス人) にしても明治維新を果たした日本を認めたのではなく、江戸の文化の高さと優しさに感動したのである。

1700年代前半、イギリスを中心に始まった産業革命は人類にとっては確かに夢の革命であった。機械による大量生産は人類を豊かにした。しかし、それはある種のパンドラの匣であり、以後多くの問題を投げかけるものであった。イギリスのディケンズ (Charles John Huffam Dickens, 1812-1870) は、「オリヴァー・トゥイスト」(*Oliver Twist*, 1837-39) や「クリスマス・キャロル」(*A Christmas Carol*, 1843) によって、あるいはフランスのユゴー (Victor, Marie Hugo, 1802-1885) は、「レ・ミゼラブル」(*Les Misérables*, 1862) によって、あるいはマーガレット・ミッチェル (Margaret Munnerlyn Mitchell, 1900-1949) は「風と共に去りぬ」(*Gone With the Wind*, 1936) によってその問題を白日の下にさらした。つまりイギリス、フランスの産業革命が多くの貧富を産み出し、また遅れてその革命を南北戦争の形でおこなったアメリカの現状を詳細に記したものである。それらの作品は、その変革に

よって現れた貧富の差という経済至上主義によって人間の尊厳が損なわれる現実を示したのである。

アメリカ出身のモースもイギリス出身のバードもこれらの矛盾と問題点を十分に知った人物であった。それゆえ、未だその変革途上の日本を見たとき、その矛盾の気配がある東京や横浜には何らの関心も感動も示さず、それらの矛盾から遠い鄙びた田舎や名もない庶民の心情に心動かされたのである。

富める者と貧しい者は、日本型産業革命である富国強兵策が行われる以前にも存在していたことは事実である。その貧しさを目の当たりにしたバードの記述もある。しかし、その貧しさの中に、「自分の国で人道の名に於て道徳的教訓の重荷になっている善徳や品性を、日本人は生まれながらに持っているらしいことである」(モース)や「彼らはお互いに親切であり、礼儀正しい」(バード)と日本人の資質を見るのである。

3 コミュニケーション能力と日本的 芸能の相関

コミュニケーション能力と一言で言われるがその内容を詳細に見てみるといくつかの要素があることに気付く。2006年頃から流行したKY(「空気が読めない人」という語に代表されるような場の空気(雰囲気)を読めるか読めないかにコミュニケーション能力は深く、また密接に関わっている。相手に不快感を与えないタイミング(TIMING)や表現で、自分の感情や意思を相手に伝える能力が欠落した人に対してKYとラベリングしたのである。そこには単純に場の空気が読めないだけでなく、上手にコミュニケーションを行うための体系づけられた知識、技術(SKILL)の未熟さもしくは欠落も指摘できる。それらのスキルを総称すれば、ソーシャルスキル(SOCIAL SKILL)とも言うべきものである。また、自己の主張だけに固守するのではなく、自分の考えを論理的に明確にして、相手に表現し、伝える能力と

いう謂わば「論理的コミュニケーション能力」とも言うべき能力もコミュニケーション能力の重要な要素となる。コミュニケーションとは、会話のキャッチボールであり、それを上手く行える能力を持っていればコミュニケーション能力は高いということになる。つまり相手との合意形成(CONSENSUS)の能力が大きな要素となっている。

これらに加えてコミュニケーション能力に欠かせないものがある。それは「わらい」というツールである。わらいという漢字は本来「笑」ではなく「咲」と書かれたものであった。『新字源』(角川書店)は、「咲」という漢字に「笑の本字」と断定し、「笑」は誤り伝わった形としている。また『広辞苑』(岩波書店)には「わらう」という項目に「笑う・咲う」とふたつを列記している。花が咲けば実がなり、実がなれば豊かになり、豊かになれば幸福になり、幸福になればわらう、という円環のなかに「わらう」という動作が生まれるのであろう。それゆえ「わらう門には福来たる」ということわざも生まれたに相違ない。

柳田国男の「物語と語り物」、「笑の本願」、「不幸なる芸術」あるいは「鳴鶴の文学」には日本人の笑いに対する多くの示唆がある。種子が割れるように赤子が笑うことから「割れる」が「笑う」の語源だとする論から、下卑た話題から来る笑い、強者が弱者を笑う笑い、あるいは弱者がわざと強者に笑われようとする道化の笑い、洒落に代表されるような言葉の笑いなど複雑な笑いの分析は、時代思潮から日本文化論にまで至っている。確かに先人は、笑いを醸し出すユーモアを発する人間に対して好意的な印象を持っていた。つまり健全な笑いは、人間同士の衝突を回避し、敵対心や緊張感を緩和させ、人間関係の距離を縮めコミュニケーションをスムーズにする効果があるということである。柳田国男が笑いの研究を始める契機は、戦後の日本人が真の笑いを失っているという危惧から派生したものであった。それは、日本人が、実は笑いをとても大切にする民族であったという認識に根ざしていたのである。

日本人はどちらかと謂ふと、よく笑ふ民族である。上方あたり人間は懇意な者の為に笑ひ、見馴れぬ人に対しては笑はぬだけの差別を立てて居るが、関東以北では無邪気なほど無差別に笑つて居る。小泉八雲さんの「日本人の微笑」は有名なる文章である。いつもにこにこして居ることを愛嬌と謂ひ、心のやさしい兆候と目して居る以外に、怒つた時でも憎んだ時でも、少し笑ひ過ぎるかと思ふほど我々はよく笑ふ。高笑や空笑は社交の様式をなして居る。宴会などは何でもかでも、必ず笑を以て終始することになつて居る。つまり善意にこれを解説するならば、日本人は笑の価値を知つて居る国民なのである。（「笑の文学の起原」）

また、この引用にもある小泉八雲（Patrick Lafcadio Hearn）の文章も引用しておく。

日本人の微笑を会得するためには、少し日本の古い、自然の、民衆生活に入る事ができなければならない。近代化した上流社会からは学ぶべき物は何にもない。高等教育の結果によつて人種の相違の深い意義は毎日一層深く説明されるのである。高等教育は感情の融和にはならないで、かへつて東西洋の間の疎隔を一層深くするだけのやうに思はれる。（中略）。即ち西洋風に高い教育を受ければ受ける程、その日本人は心理的に私共と遠ざかつて行くと言ふ事である。

その後もつと遙かに分らない微笑の意味が私に分かつて来た。日本人は死に面して微笑する事ができる。そして事実いつも微笑する。しかしその時微笑するのも、その外の場合に微笑するのも同じ理由である。その微笑には軽侮や偽善はない、又弱い性格と聯想されがちの病的あきらめの微笑と混雑してはならない。それは念入りの、長い間養成された礼法である。それは沈黙の言語である。しかし人相上の表情に関する西洋風の考からそれを解釈しようと試みるのは、漢字を普通の事物の形に實際似て居る、又

は似て居ると想像する事で解釈しようとするのと殆んど同じく成功しさうにはない。（「日本人の微笑」）

このようにコミュニケーション能力の要素として笑いは重要であることが分かるし、それ以上に笑いは、日本人特有の文化的背景によって形成されていることに気付く。

以上の事柄を整理してみると、(1)タイミング (TIMING)、(2)ソーシャルスキル (SOCIAL SKILL)、(3)コンセンサス (CONSENSUS)、(4)笑いというツール、ということになる。

これらコミュニケーション能力を形成する要素を学び、取得するためには、コミュニケーション学の先進国である欧米諸国に範を求めべきであるという指摘があり、それこそが国際化の波にのることであると提唱されている。異文化の垣塙である地で発達したコミュニケーション能力は、学ぶべきところを多く持っている。しかし、それらを日本に移入するとき、どこか自分の意見を主張する仕方にも重点が置かれ、相手との調和や合意形成に主眼がなくなっている風潮を見てしまう。

1800年代以前の日本は、対立の構図が際立つほどの苛烈な異文化体験はなかった。いや正確には、鎌倉期の元寇や戦国期の宣教師来訪によって危険を察知したからこそ徳川政権は、鎖国政策を重要な政策としたのである。その閉鎖された空間によって日本型コミュニケーションは独自の発達を遂げた。そこには欧米諸国がとらえているコミュニケーション能力は不在であったと考えるからこそコミュニケーション教育の根幹に欧米先進国の教育方法を導入するという考えが生まれたのである。

しかし、ここで注目すべきことは前述したコミュニケーション能力の4要素が、その独自の発達の中に内包されていたということである。

(1)タイミング (TIMING) という要素を考えてみよう。「当意即妙」とか「間髪を入れず」というタイミングの妙をとらえた語は多くある。伝統

芸能の中、たとえば歌舞伎の「助六由縁江戸桜」にある助六と意休との対決の序章には、揚巻が、意休に悪態で言い返す場面がある。揚巻は、助六と意休を雪と墨に例え、また「くらがりで見ても助六さんと意休さんを取違えてよいものかいなァ」と命がけで言い放つ。その反論の展開は、観客の胸をすくし、それ以上に助六と意休の掛け合いはタイミングに勝る助六の格好良さが際立つ場面である。あるいは、落語の演目で知られる「時そば」などはタイミングを逸したら面白みはなくなってしまう。面白みという観点よりも観る者、聞く者は、そのタイミングを持つ者を粋と賞賛し、持たない者を野暮と揶揄するのである。その考え方は「助六由縁江戸桜」や「時そば」に止まることはなく多くの作品の中に存在する。前述の柳田国男が注目した「東海道中膝栗毛」にも「浮世風呂」にもそれらの美意識は反映されている。江戸の庶民が、粋の象徴であった成田屋市川團十郎に憧れて、成田詣が一大ブームを巻き起こしたのもこういう背景がある。

(2)ソーシャルスキル (SOCIAL SKILL) という要素を考えてみよう。繁華街での歩行のルールは、我々車社会にあれば車は左、人は右という秩序を堅持しなければ事故に繋がると考えて考案された。しかし、「七三の道」、「傘かしげ」、「肩引き」と呼ばれるような歩行のルールは決して事故を未然に防ぐという発想ではなく、多くの往来で〈WIN・WIN〉の関係を構築するために編み出されたものである。つまりソーシャルスキルとして一般化していたのである。俗に言われる江戸しぐさと言われる処世は、日常の中ではこのように〈WIN・WIN〉の関係こそが粋であると考えた庶民の知恵であったのである。前述した「助六由縁江戸桜」の舞台三浦屋から派生する高尾太夫の話が、落語へと移って「紺屋高尾」となって感動を形成するものや「文七元結」などの名作は、このソーシャルスキルの完成形にあると考えて良い。

(3)コンセンサス (CONSENSUS) においても同様の作品を見ることが出来る。落語の「千早振る」などにある知識浅薄ゆえの行き違いを笑いの

種にするのは、明らかに合意形成能力の欠落から来るおかしみであり風刺である。浅学非才や勘違いを笑いの種にする作品は、これらの落語や「東海道中膝栗毛」などの滑稽本に加えて多く見いだすことができる。

(4)笑いというツールに関しては、柳田国男及び小泉八雲の引用で示したとおり、非常に日本的なものである。「長い間養成された礼法である。それは沈黙の言語である。」というようになかなか西欧人には理解しにくいと明治期の小泉八雲が書いているが、それは現代も同様で、日本人の笑いの本質はまだまだ理解されているとは言い難い。

4 コミュニケーション教育の課題

国際化もしくはグローバル化社会に生きる人材を育成し、またその意味を問い直すという動きは、現代の教育論の中核になりつつある。それは、英語を流暢に話すことができ、やがてグローバル企業に就職できるという表面的な対応だけを意味するものではない。2020年の東京オリンピック及びパラリンピック招致のプレゼンテーションでも注目された「おもてなし」という日本独自のホスピタリティ (Hospitality) が、ビジネスにおいても、世界で評価されている。そうした日本人としての思いやりや気配りが、強みとなっている時代に至っている。

自分の意見をしっかりと発信することに力点を置きがちであるが、自分を主張できても、人の話をきちんと聞いて、相手の気持ちを大切にすることができなければ、無用な対立が生じる。日本人がこれまで大切にしてきた精神性こそ、これからの時代に求められる資質なのである。固定化された「グローバル人材」のイメージそのものを問い直す段階に至っている。英語も、対立する相手をディベートで打ち負かすために身に付けるのではなく、差異を理解し、他者とつながるための道具でなければならない。しかし、相手に対して意見表明 (Assertiveness) をする際に、必要以上に攻撃性を持ったり、逆に必要以上に受け身であっ

たり、またそれらから起こるストレスを解消するために欺瞞的であったり、作為的であったりすることは多々あることである。コミュニケーションを果たす際に最も留意しなければならないのは、「個人の境界」を常に尊重するところから始めなければならないということである。攻撃的なコミュニケーションとは、他人の「個人の境界」を尊重せず、他の人に影響を及ぼそうとして、他の人をしばしば傷つけ、また欺瞞的、作為的なコミュニケーションとは、本心を出さず、トゲのある言い方や回りくどい言い方で人を責め、正面から人と向き合うことをしない。江戸の人々が粋な人と野暮な人と区別した部分がある。

ここで問題とする「個人の境界」は、伝統的な日本型コミュニケーションの場合、さほど意識されるものではなかった。日本型コミュニケーションにおいては「個人の境界」がそれほど高くない所で発展進化していた経緯があるからである。そこには「暗黙の了解」とか「他人への配慮」が前提となった集団によってコミュニケーションが形成されたからに外ならない。つまり、ある種の「ムラ社会」でコミュニケーションは行われていたのである。

否定疑問文への答えが、欧米と日本とでは全く逆になるという事実に見られるようなことである。つまり「これこれのこと、ご存じないのですか。」と聞かれて、日本語では「ええ、知りません。」あるいは「いいえ、知っています。」と答えるべきところ、欧米では、「ノー、知りません。」「イエス、知っています。」になるという、あれである。

結局のところ、日本語は、質問者の質問の仕方に即し、その意図にそってれば「ええ」と答え、反していれば「いいえ」と答えるわけだが、欧米では、肯定疑問であろうが否定疑問であろうがそんなことにはおかまいなく、返答する者が知っているか否かによってのみイエス・ノーが決められている。こうしてわが同胞は、外国に行って否定疑問文を浴びせかけられるた

びに、どぎまぎしながら「はい、いや違った、いいえ。」「いいえ、いや、はい。」などとやって、ますます「あいまいな日本人」という神話をほこらせてしまいもするのだろう。

このような否定疑問への答え方にかいま見られるのは、自己中心的な欧米流の思考法と、外部指向的なわが国の思考法との違いにほかならない。そのうえ、そもそも私たちは、きっぱりとは「ノーと言えぬ」優しき日本人なのである。つまり、私たちのあいまいさは、多分に、他人への配慮からも生じているわけだ。

日本語におけるあいまいさと言われるものは、大別すれば、「暗黙の了解」と「他人への配慮」という二つのものに由来しているように思われる。「暗黙の了解」はまさしく了解されている以上、それを言葉にしないのは当然のことであって、それがあいまいと映るのは外部の目に対してだけである。あるいはまた、「他人への配慮」によって物言いを微妙に変えるところなど、自己主張ばかりに終始する西洋風の言葉づかいよりも数段優れていると考えることもできる。したがって、日本語における「あいまいさ」なるものは、まずは、本来の意味においてはあいまいではないのだと、そういうこともできるだろう。

しかしながら、この「暗黙の了解」や「他人への配慮」が、日本語の内部においても次第に崩れてきているとすればどうだろう。暗黙の了解があってこそあいまいさを免れていた私たちも、そうはいかなくなり、他人への配慮があってこそあいまいも美德になっていたのが、一転して、単なるあいまいとしての悪徳になってしまうのではないだろうか。(加賀野井秀一「あいまいな日本人?」)

上の引用に示した加賀野井秀一の文章は、日本型コミュニケーションの問題点を見事に浮かび上がらせている。「暗黙の了解」も「他人への配慮」もある種の「ムラ社会」に基盤があるものであり、

その「ムラ社会」が意識されない場所においては、単に曖昧で自己主張のないコミュニケーションスタイルでしかないのである。異文化という障壁がある場合、日本人の美德とも言うべき「他人への配慮」も理解してはもらえない。

これらの問題を踏まえて、コミュニケーション教育の方向を今一度整理してみる。確かに日本人はその文化の中に誇れるコミュニケーション能力を持っている。しかし、その優れた日本型コミュニケーションは、一旦「ムラ社会」から離れた場合、何ら効力を持たないものになってしまう。異文化理解を進めることによって障壁をなくしていくとするプログラムもある程度の効果は期待できる。しかしお互いの意識が「個人の境界」を理解し、越えようと思わない限り、真のコミュニケーションには至らない。また、顔を見てコミュニケーションを取るという形はSNS (Social Networking Service) の進化によってますます希薄になり、従来の「ムラ社会」は崩壊し、また新たな「ムラ社会」が起りつつある。それらの現状に合ったコミュニケーションとは何か、あるいは日本型コミュニケーションの可能性とは何かを真剣に模索する時期になっている。

5 学校社会におけるコミュニケーション教育の可能性

「コミュ障」という語が流行語になっている。「コミュニケーション障害」を略した言葉であるが、それほど深刻な意味ではなく、単に仲間意識の構築が苦手であるとか、対人関係に臆病であるとかの意味で使用されている。照れ隠しや謙譲の意識で、使用されるのであれば問題はないが、学校生活(社会)で使用されるとしたら看過できない。また、近年クラス担任がコントロールできないクラス運営を指して「クラス崩壊」という語も多く使用されるようになってきた。「コミュ障」や「クラス崩壊」が、コミュニケーション教育の不完全さに起因していることに気付かなければならない時期に来ている。少人数教育の利点は、団

塊の世代教育の反省として考案され、その効果は絶大なものであった。しかし、少人数教育の中に溶け込めない者にとっては、その閉塞感に耐えきれなくなっている。つまり少人数とは、単に人数の問題ではなく、ひとつの「ムラ社会」の構築であり、そこから派生する「暗黙の了解」とか「他人への配慮」といったものに裏打ちされたものでなければならない。少人数であれば自然発生的にそれらの感情が生まれるわけではなく、江戸の人々が時間の経過の中で作り出したような努力が必要である。少人数だからグループの和が形成できるわけではないことに気付くべきである。

また、クラス運営にあたっては生徒個々人の「個人の境界」をしっかりと見定めなければならない。クラスの担任だからといって、高い位置から攻撃的に接し、またクラスをまとめるという目的のために欺瞞的で作為的に生徒と接すれば、コミュニケーションは決して成立することはなく、早晚崩壊への道を辿ることになる。教員が、本心を出さず、トゲのある言い方や回りくどい言い方で責め、正面から生徒と向き合うことをしなければ、教室にいる唯一の大人(教員)を模倣する生徒が、どこに向かって行くかは、すぐに想像できるであろう。クラスという「ムラ社会」の構築が難しいことは、ここからも理解できる。しかし、クラス運営にあたって、日本型コミュニケーションの果たす役割は大きい。

「個人の境界」と「ムラ社会」とのバランスの難しさに加えて、グローバルな社会への順応も考えなければならない。少人数教育の利点のみ言われているが、クラスごとの壁をなくし、オープンスペースでの授業運営が、実験的に行われている。これは、「ムラ社会」的クラス運営から脱して、「個人の境界」を重要視するプログラムである。欧米諸国のプログラムを導入したものであるが、まだ試行の段階でその効果は一長一短の域を出ない。

しかし、ここで気を付けなければならないのは、少人数教育だから問題は解決する、とかオープン教室だから問題は解決するというような形の

問題ではなく、常にコミュニケーションを円滑にする方法として何が必要で、何を排除しなければならないかを考慮しなければならないということである。

日本型コミュニケーションの優れた部分を見直し、かつグローバル社会に通用するコミュニケーションを模索し、次代を担う生徒を育てるために自らが時代に合ったコミュニケーションを模索し

なければならない。教員にとって難しい時代になったことを自覚しなければならない。IT教育からICT教育へと進化し、従来の「ムラ社会」や地域のコミュニティが大きく変貌し、SNSに代表されるコミュニケーションツールが氾濫する状況において、日本型コミュニケーションの本質を見直すことは無駄なことではない。